

新宗教における感染症の語り

—COVID-19 影響下における公式メディアを中心に—

坪井 俊樹*

1. 序論

本論では、2020 年 2 月以降世界的にパンデミックを起こし、日本国内でも感染者のみならず、緊急事態宣言の発令による大規模な行動制限や、経済的困窮などの困難をもたらした COVID-19 (以下コロナ) が宗教界、特に新宗教に与えた影響について論じる。

筆者の研究目的は、重篤な症状をもたらす感染症と、それに伴う社会不安や社会問題が深刻化する中で、肉体的・精神的・経済的な困難を抱える人が急増した 2020 年以降の 3 年間の日本において、宗教がどのような「救済」をもたらしたのか、また信徒はそれをどう受け止めたかについて教団を横断して調査することで、現代日本における宗教のおかれている現状を検証することにある。本部・支部といった上意下達システムがある程度明確に存在し、機関誌等を通じてその活動を具体的に把握することができ、トレーサビリティがよいことから、伝統宗教や民間信仰ではなく新宗教を調査対象として選んだ。

新宗教に関する研究の流れを踏まえたうえで、急速に変化する現代社会における新宗教の立ち位置を、コロナ禍という社会現象を切り口にし、文書化された信徒の語りと指導者の語りを通じて分析することを目的としている。

戦後の民衆の新宗教への入信動機を端的に表現した言葉として、「貧・病・争」がある。カリスマを有する宗教指導者が心身の不調を抱える信徒に「奇跡」を齎してそれを治癒するという行為は、多くの新宗教教団の勃興期に見られるものである。また、信徒間での相互扶助や、指導者によるアドバイスを通じて困難を打開する希望を得ることで、貧困や家庭・社会における問題を抱える信徒の精神的救済が行われてきた。しかし、高度経済成長を経た 70 年代以降、精神的な豊かさへの需要や、社会的目標の喪失による精神的な欲求不満へと入信動機は変化し、求められる宗教の形も神秘的な世界観・霊的な世界観を持ち現世利益を中心とする「霊術系宗教」へと変化したといわれる (櫻井 1997: 138-139)。

しかし、バブル崩壊などを経た日本社会においては、経済発展の停滞と格差の拡大、社会的排除などが再び深刻化した。2010 年には NHK でドキュメンタリー『無縁社会』が放送され、社会的繋がりや孤独死が問題視された。翌年の東日本大震災からの復興においては、「絆」が重要視された。その後、社会的に十分注目されていなかった貧困の問題にスポットライトが当たるだけでなく、社会における分断・排除への動きはさらに強まっていった。そして、2020 年以降のコロナ禍は人々の分断や衝突、そして経済的困窮に拍車をかけるものとなり、「貧・病・争」の問題を抱える人々が再び増加しているといえる。

* 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

また、若い世代における宗教的なものごとへの関心は、以下の調査に基づけば必ずしも低下しているとはいえない。國學院大學日本文化研究所が行っている学生宗教意識調査によれば、2015年の第12回調査では信仰を持っている者が10.2%、信仰はないが宗教に関心を持っている者が35.5%（非宗教系大学に限ればそれぞれ7.7%、38.1%）（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編 2017: 328）であったものが、2020年にはそれぞれ10.7%と51.9%（非宗教系大学ではそれぞれ9.0%と52.9%）（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編 2022: 2）になり、信仰を持つ者の割合は横ばいであるが、宗教に関心を持つ者の割合は2010年以降最大となっている¹⁾。同大学の日本文化研究所の研究員である今井信治は、西山茂の「教団嫌いの神秘好き」という表現を援用して、信仰層と関心層の差異を分析している（今井 2022: 54）が、感染症の蔓延が深刻化し、緊急事態宣言が発令されるという特異な環境下で行われた調査であることも、関心層の拡大に影響を及ぼしていることが推察できる。

新宗教の指導部のコロナ下での言動と社会の反応に関する論考としては、堀江宗正による「宗教と感染爆発」がある。同論文では、ユタ州における末日聖徒イエス・キリスト教会と、日本国内の創価学会と幸福の科学の活動に関する雑誌記事に言及している。D.E. Singhらは、「COVID-19の悪魔化」と、宗教活動の実行により教団が感染源として批判される「宗教のスティグマ化」、それに抗い自身を清浄化しようとする「宗教の再純化」の3段階のプロセスをコロナ下の宗教は踏むことになると論じている（堀江 2021: 79）。堀江は、それを踏まえて、日本においては、宗教外のナショナリストによる中国の悪魔化はあったが宗教への無関心から宗教をスティグマ化する言説はほぼなく、宗教側も劇的な再純化を起こさなかったとして、宗教の長期的な活動の停滞の兆しだとしている（堀江 2021: 91）。実際に、筆者が調査対象とした3年間では、安倍晋三銃撃事件以降に旧統一教会と政権の癒着が批判されるまでは、宗教をスティグマ化する大規模な言説の発生は見られず、コロナ下での国内の宗教の対応を批判する記事もほぼなかった。その一方で、調査対象とした教団では、コロナ下において宗教者としての対応を問い直す「宗教の再純化」のような動きも見られた。日本の新宗教の対応を読み解くうえで、Singhの提示した類型は部分的に適用可能であると考えている。

本稿で取り上げる教団は、それぞれが独自の教義体系を持つ、天理教と幸福の科学である。

天理教は、村上重良の『新宗教 その行動と思想』では、戦前に教派神道となった「近代社会成立期の新宗教」として分類される。世襲カリスマの指導者を中心として、分教会ごとに比較的自由的な活動が行われており、独自の教育機関を持つという特徴がある。

幸福の科学は、80年代に勃興し、西山茂・島菌進らが新新宗教として分類したものの内最大規模の教団である。2023年まで教祖が生存し、極めて活発な出版活動を行い、各地の精舎と本部に強固なトップダウン型の連携がとられ、独自の教育機関と政党を持つという特徴がある。

¹⁾ ただし、15年の総回答者数は6017人、20年の総回答者数は1656人と大きく異なることに留意する必要がある。

調査の対象としては、教団が公式に発表している資料のうち、教団のラジオ番組、Web サイト、教団の書籍、機関誌（紙）を扱う。

宗教が有する特性のうち、本稿では主に「意味付け」と「癒し」の問題を扱う。ウェーバーが『世界宗教の経済倫理』で論じた「苦難の神義論」のように、災害や病気などの理不尽な現象を経験した人々が求める、「なぜそうなるのか」という問いに、古くから宗教は答えを提示してきた。古い時代においては、天罰・神の怒り・カルマの問題といった、被害を受けた本人や社会に責任を見出す語りが見られたが、現代においてそれらは不適当なものとして批判を受けやすい。現代の宗教指導者の語りを通じて、災害はいかに理解されたかを分析することは有意義である。

現代において「癒し」ととらえられる現象と宗教に関する研究は古くからおこなわれており、その定義もまちまちであるが、本稿では崇教眞光を対象に宗教社会心理学に基づいて回心と癒しを分析した杉山幸子の定義を利用する。杉山は、癒しに関する宗教学の研究史をまとめたうえで、信仰により現実の問題が解決する「救い」を包摂する、出来事に意味を与えそれと和解することとして定義し（杉山 2004: 83）、修養的な癒し、呪術的な癒し、共同体的な癒しに分類している（杉山 2004: 98）。これらの定義が、集団での活動が規制され社会的分断が強まったコロナ下での活動の分析において、どのように変化したのかは検討に値する。

なお、「教団指導者」は教祖や世襲の指導者、教団本部の理事、教学において指導的立場にある人物など、教団の活動全体や信仰の形態に大きな影響を与えている人物を指し、「信徒」は地域の分教会の指導者や役職を持たない信徒などの、教団の教えを守り伝えるうえでより従属的な立場にある人物を指すものとする。

2. 教団指導者のコロナをめぐる言説

2-1 コロナ禍という困難への意味付け

『宗教学事典』の「病気」の項では、「突然個人を襲い、身体的にも社会的にもそれまでの秩序や価値観を壊すもの」としての側面を病気は持ち、病とその癒しは世界観の再構成や創造、社会的秩序の改変の契機にもなると記されている（海山 2010: 639）。コロナ禍においても、多くの地域で社会システムが破壊され、秩序の回復への訴えや、現代社会の問題点の改善を訴える社会運動が各地で勃興しており、現代において当然視されてきた世界観・社会的秩序が大きく問い直されている。その状況下において、新宗教はコロナをどのような存在として意義づけ、同時に教団外部の社会をどのように改めようとしたのか、という点について考察することで、新宗教の現代における困難への対応を分析したい。

2-1-1 終末論と「霊界科学」 多元的にコロナを解釈する幸福の科学

新新宗教は、80年代以降の勢力拡大期において、終末論的な教えを説くものが多かった。高度経済成長による日本社会の急速な発展と、その後の石油危機や公害問題の深刻化は、繁栄の終わりへの恐怖を人々に与え、「世の終わり」への関心を招いた。幸福の科学はノストラダムスの霊言として壊滅的な危機の発生と日本が世界の支配者となることを予言した

(島田 1992: 120)。ノストラダムスの大予言において終末の年とされた 1999 年が過ぎること、教団の信徒が離れることも予想されたが、信仰がすでに定着した信徒が多かったこともあり、大きな減少は（公称信徒数の上では）見られなかった。

幸福の科学の教祖は、2008 年に 2012 年と 2043 年に人類滅亡の可能性があると予言し、2010 年には、ノストラダムスの予言は人類に悔い改めのチャンスを与えたもので、2037 年に人類滅亡の有無が決まるという霊言を公表した（『The Liberty』 2022.8 月号: 15）。終末の予言を先延ばしにすることで、教義の根幹の一つとしての終末論を温存しているといえる。しかし、コロナのパンデミック下では、「地球最後の日シミュレーション」が起きようとしており、「黙示録の封印の一つが解かれたような」恐ろしい試練であるといった記述（大川 2020a: 106-108）はあるものの、終末論的な語りは積極的にはなされなかった。

幸福の科学では、コロナを中国の生物兵器とする「中国の悪魔化」言説を繰り返し唱えているという特徴があるが、それ以外にも、独自の宗教的価値観からのコロナウイルスとコロナ下の社会に対する意味付けをしている。教団の「霊界科学」に基づくコロナの理解は、ウイルスは本来有害でも無害でもなく、「悪しき想念」の影響により有害化すると考え、「戦う想念」を持って立ち向かうべきであり（大川 2020b: 84-85）、信仰心を持てばウイルスが付着しても繁殖しない、というものである（大川 2020b: 88）。しかし、ウイルス感染を「憑依」と同じ原理で理解する姿勢は、「夜の店」の接客者は色情霊に憑依され、地獄界につながっているために神仏の光を受けられず感染が拡大した、といった職業差別的な言説をも生んでいる（『The Liberty』 2020.11 月号: 30）。

国内外のテレビ局で一般向けに放送された講演である「信仰からの創造」では、コロナ禍においても人類の営みは続く以上、「特効薬があるとは思わずに、まずは毎日毎日を充実した生活に変え、神仏に祈りを捧げながら、この世の中にとってプラスになり、来世に幸福な未来を築くために役に立つような仕事」（大川 2021: 319）を行うことを求めた。そして、社会不安の中でも、人々に希望や勇気を与える人が必要であり、一人ひとりが「新しい力」を作り上げて発揮するようという呼びかけで終わっている（大川 2021: 332）。

2-1-2 コロナを「親心」として考える 天理教による解釈

天理教は、教祖の言行・生き方を「ひながたの道」として尊び、信徒の目標であり、困難に際して立ち返るべき指針とみなしている。そのため、指導者・信徒の語りにおいても、教祖時代の経験や、おふでさきの文言の引用が多くなされている。

ここでは、機関誌『みちのとも』に掲載された指導者のインタビューを中心に、教祖への言及を軸に、教団のコロナへの意味付けを読み解きたい。

同誌では、20 年 5 月から 7 月にかけて、以下の記事を掲載している。

- ・「新型コロナウイルスによる大節を乗り越えるために」中田善亮表統領 20 年 5 月号
- ・「新型コロナウイルスによる大節に思うこと」宮森与一郎内統領 20 年 6 月号
- ・「この節に際しての思案」橋本武元天理大学長 20 年 7 月号

中田表統領はまず、感染症には親神様の思し召しがあり、信徒は事の成り行きを見守るのではなく、柔軟に対応して大節を乗り越え、節から芽を吹くご守護を頂けるよう、深く思案することを訴えた（『みちのとも』 2020.5 月号: 5）。過去の感染症の経験をいたずらに敷衍

せず、現状に即したアップデートをすべきだとしている（同上: 6）。そのうえで、大節を乗り越えるにあたっては、「陽気ぐらし世界の実現」を目標に、自分自身を見つめ直し、自分にできる実践を行い、互いに前向きに励まし合うことを求めた（同上: 8-9）。前向きな反省の上で、現状を「成人の旬」（人間として宗教的に成長する好機）と受け止め、世の中の治まりを真剣に願い、親神様の親心を信じきり、「おたすけの心」をさだめてたすけ合いを着実に前へ進めることが信仰者に求められる努力だと語っている（『みちのとも』 2020.5 月号: 11）。

宮森内統領は、コロナに対する人々の受け止め方は、「人に感染させたくない」と「自分が感染したくない」という姿勢に二極化しているとしている。前者は人を慮る、いたわる気持ちであり、人をたすける心につながるものであるが、後者は人の行動ばかりを気にして、他人への指摘・批判を繰り返す性格につながるとして、「優しさ」が一番のキーワードだと語った（『みちのとも』 2020.6 月号: 5）。直接会えなくても優しい言葉をかけること、信仰心が途切れた信徒を責めず優しく対応することが、コロナ終結後の姿に違いをもたらすとしている（同上: 9-10）。無差別に罹患する感染症は、「世界一れつはみな、兄弟姉妹であり、身上は等しく親神様のかりもの」であることに世界が気付くチャンスであり、つらい思いをしている人を受け止める大きな心を目指し、家庭環境においても、互いに助け合うことに気づく機会でもあるとする（同上: 10）。日常において信仰の理由を説明し、後継者にそれを継承すること、教会につながる信者に優しい心を伝えるよう努力することなど、自分にできることで優しい心と勇み心を養い、神に縋りつけば心配はいらないとしている（同上: 11）。

橋本武人は、感染症も温暖化も人類が破壊した自然界のバランスを回復する動きであり、全人類が力を合わせて立ち向かう必要があるとする。各国において個人主義や自国第一主義のコロナ対応がなされ、人心荒廃により逸脱者の排除がなされるという状況から、感染症は、人類がいまだ協力・連帯して暮らす「陽気ぐらし世界」に実現しうるほどの心の成人を遂げていないことを示したと主張する（『みちのとも』 2020.7 月号: 12）。自己中心的な心の「ほこり」が払われなければ、「心の道」としての「いんねん」となり、「いんねん」通りの心づかいになる。身上・事情は心通りの守護であり、「いんねん」を自覚し「ほこり」を払う契機として神が積極的に「てびき」しているものである（同上: 14）。長い人類の歴史を通じて「いんねん」を形成してきた我々が人をたすける心へ入れ替わることは困難だが、凡人でもできる「人をたすける行い」の積み重ねを親神が受け取って守護することで心の成人ができる（同上: 15-16）。世俗世界の行為でも、利他的な行動が現実社会を変革し、神人和楽の陽気ぐらしという聖なる世界の建設につながるとしている（同上: 17）。

・2-1-3 小括

各教団の COVID-19 への意味付けには、それぞれが持つコスモロジーが極めて明確に表れていることが確認できる。他教団では、教団が指し示す未来の形に到達するまでの過渡期における苦難の一つとしてとらえ、それらが過ぎ去ることで教団の掲げる理想社会に近づく、という未来志向型の語り（世界救世教・杉原清晃理事長）のほか、教祖の教えに基づいてウイルスを悪や不浄として断罪しないという語り（生長の家・谷口雅宣総裁）も見られた。幸福の科学では、人為的な生物兵器や宇宙戦争の影響、霊的な憑依現象など、この感染症に

対する多様な意味付けが一人の指導者から発せられている点で特徴的である。信徒は、教祖のこれまでの著書を通じてコスモロジーを共有することで、霊言として提示される意味付けを教義体系の一部として受容していると考えられる。

天理教においては、他の教団と比較しても教祖の教えや言行に関する言及が多くみられる。コレラや天然痘といった危機を教団設立初期に経験しており、信仰を通じて生き延びることができた、という人々の成功体験が、信仰の「ひながた」として残っているために、感染症蔓延という非常時においても、教祖の教えに立ち返るといふ姿勢が保たれ、それを現代社会の状況に応じて適用することで、時代錯誤や杓子定規の判断にならないよう心掛けて教えを提示したものと解釈できる。

2-2 コロナ下における新宗教の祈り

『宗教学事典』では、祈りは、宗教現象の中でも超時代・超地域的にみられる現象だとされる。石川明人は、F・ハイラーの『祈り』(1918)を援用しながら、祈りと呪術、感謝や賛美、占いや予言、誓願の間には流動性があり、日本の伝統的宗教実践では、祈りの言葉自体に生命力や神聖性が宿ると考えられていた、という、意味を広くとった定義をしている(石川 2010: 260-261)。

本節では、ハイラーらの考えを用いながら、新宗教における祈りの実践がコロナ禍によってどのように変容したのかを読み解く。

2-2-1 新たな祈りは行われたか

まず、既存の祈りの形式に加えて、新たな形での祈願がなされたかを検討する。

幸福の科学は、様々な現世利益的な祈りを提示していることで知られる。20年の感染拡大初期から、「中国発・新型コロナウイルス感染撃退祈願」を行っている。その持つ意味は、「主なる神エル・カンターレの御光によって、奇跡を起こしていただく」ものとされている⁽²⁾。精舎で導師による祈願経文の読誦を聞き、お守りを受け取るという方法であり、感謝・精進・確信・全託の精神で、無私なる祈りをささげることが求められる⁽³⁾。

有料で祈願を受けていることへの批判に対しては、病院も有料であること、教団の講師にも俸給が出ており、奉納を得る必要があること、信じれば治るのだから「命」と交換なら安いものであることを以て反論している(大川 2020c: 85)。また、プロフェッショナルな宗教者を存続させるためにも経済原理との調和は必要だとしており、詐欺商法と批判される背景にはタイムリーな行動ができず、奇跡を起こせない伝統宗教の嫉妬があると批判している(大川 2020b: 69-71)。機関誌では、信仰していない家族のために行った祈願でもコロナの陽性反応が消えたとされ、信仰の有無を問わず祈りが通じることがアピールされている。

(2) 「『中国発・新型コロナウイルス感染撃退祈願』『コロナ変異株感染防止祈願』『コロナ・ワクチン副反応抑止祈願』のご案内〈祈願案内〉」,幸福の科学公式サイト. <https://happy-science.jp/news/info/11507/>

(3) 「祈願のご案内」,幸福の科学精舎公式サイト. <http://shoja.jp/abouts/prayers/>

・2-2-2 従来の祈りはどう変化したか

その一方で、祈りの形式を大きく変化させず、新たに祈りの時間を設ける、オンラインで祈りを配信するなどの対応を行った教団も多くあった。

天理教で、初めて参拝者なしで行われた20年3月の月次祭では、祭主の中山大亮によって、「このような形で月次祭をつとめることは、誠に申し訳ないことでございますが、親神様に、御守護を願う真実をお受け取りくださいますようお願い申し上げます」という奏上がなされ、現状を不安に思うのではなく、陽気ぐらしへ向かわせたいとの親神様の親心の現われと受け止め、「反省の上に今後の歩み方を思案し、与ったふしを生かすことができるよう、よふぼくの務めを実行」という決意表明をしている（『みちのとも』2020.5月号:13）。

天理教本部では、新型コロナ終息の「お願いづとめ」が中山大亮と表統領・内統領らによって21年4月から22年3月まで行われてきた。

その儀式におけるあいさつでは、感染状況の変化に従って、親神様のご守護を強調して信徒の不安を取り除く語りから、自身の行いを反省・改善し、主体的に「たすけ」を行うことを求める語りへと変化しており、受動的なおたすけの享受から、お道の実践者としての能動的な救済の決意へと、同じ祈りでもそれがもつ意味のウェイトが変化していることが見て取れる。

・2-2-3 小括

これらの比較から、いずれの教団も、コロナ流行が本格化した20年3月から緊急事態宣言が発令された4月ころまでに何らかの形で祈りを実践し、あるいは祈りに関するメッセージを発信しているという共通点が指摘できる。コロナ情勢が急速に悪化したことで、多くの人が強い不安を抱いた。その不安は、ポップカルチャー的な「流行り神」としてのアマビエブームに見られるように、困難を救う存在を見出し、その助けを借りたい、という心境になる人々を生み出した。そのような状況において、すでに確立した信仰を持っている新宗教の信徒は、自主的な祈りの実践を行うと共に、教団のカリスマをもつ指導者らによる祈りを求めたと考えられる。また、教団においても、信徒の幸福度が下がり、理想とする世界のあり方から大きく離れた状況が展開する中で、信徒の苦しみを軽減するためにも、また災害の犠牲者としての死者・感染者に対する道義的な必要性などから、神と信徒のための礼拝儀礼が行われた、といえる。

また、指導者が信徒全体を代表して神に「たすかり」を求めて祈願をおこなう天理教、導師という専門的な役割を持つ信徒により有料で祈願を行う幸福の科学の事例にみられるように、教団によって祈りへの信徒の参加の度合いが大きく異なることは注目に値する。それらの差異の背景には、世襲カリスマを重視し、世界の中心（Axis mundi）において儀礼を実践することに重要な意味がある（天理教）、教祖の著作を読み、講演を聞くという受動的な活動を信仰の根幹とし、出家制度により専属の指導者に特別な意味が与えられている（幸福の科学）といった、それぞれの教団の成り立ちや教義の根本的な部分の影響が見られる。

3 新宗教信徒のコロナ下での信仰継続の在り方

3-1 信仰による「癒し」の実践と信徒の理解

『宗教学事典』では、世界各地の宗教は病気とその癒しに密接にかかわっており、人を癒す宗教者である“medicine man”はしばしば宗教の中核を担ってきたとしている（海山 2010: 638）

日本の新宗教においても、「病氣直し」は大きな意味を持っていた。天理教・金光教・黒住教の教祖は、いずれも自分や家族の病気を宗教実践により治癒させたことを開教のきっかけとしており、その治癒力への期待から多くの信徒を集めた（桂島 2003: 219）。

しかし、明治以降、「病氣直し」を行う宗教は迷信として批判されることになる。また、教祖の死をきっかけに教えが「教説」へ変化し、神道の一教派へと変容させられることによって、「病氣直し」の教えが持つ意味は弱まることになる（桂島 2003: 223）。

戦後の宗教活動の自由化とともに、多種多様な新宗教が勃興する時代が訪れる。その中で、療術系の宗教も着実に信徒数を増やした。80年代以降の新新宗教においても、真光系教団では手かざしによる心身の不調の治癒が重視されたほか、幸福の科学も奇跡の存在を重視した活動を行っている。

現代社会において、ヒーリングのような西洋近代医学によらない心身の不調の治癒は、「代替医療」という枠組みによって一定の地位を得ているが、感染症の治療という文脈においては、西洋近代医療による治療以外の方法は非科学的であるとみなされ、批判の対象ともなった。

この節では、コロナウイルスという未知の感染症の影響下で、信徒は「病氣直し」について何を語ったのかを読み解く。

・ 3-1-1 天理教に息づく「病氣直し」の教えの現在

天理教は、病氣やケガの治癒や快方に向かうことを親神様の「ご守護」「おたすけ」ととらえ、熱心に祈ることで快復したという信徒の語りがしばしばみられる。幕末から続いている「身上たすけ」の方法として、教祖殿にお供えされた洗米を包んだ「御供」の服用がある。信徒は、病氣になった時や不安を感じるときにそれを服用する。教祖の「おさしづ」には「何も御供効くのやない。心の理が効くのや」とあり、教祖の理を頂くことでその働きを得ることができる（『みちのとも』 2021.2月号: 13）と考えられている。御供に関する3人の教会長の座談会では、入院患者への面会が制限される状況でも、御供が手元にあることで「教祖がそばにいてくださる」という安心を得て医療に一層の効果が期待できることや、緊急事態宣言下で発熱を御供で治した経験から、「コロナの節」のさなかではこれまで以上に御供のありがたさを信徒に伝えているという語りがなされている（同上: 16-17）。

また、ラジオ番組でも、息子がコロナに感染し、その妊娠中の妻も陽性であれば早産しなければならない状況下に置かれた際に、「おつとめ」を通じて「自分自身の心のほこりを払うことを神様にお誓いし、病気の平癒をお願いする」ことを続けた結果、妻は陰性であったという事例が語られている。この信徒は、不安な出来事があるたびに「おとつめをつとめることによって、不思議な安心感に包まれ」と語り、平凡な日々が続くことこそ奇跡だ

と語っている⁽⁴⁾。

天理教において、「病気直し」は現在も信仰の大きな根幹であるといえる。そして、安心を得られるという精神面での救いに語りのウェイトを置くことで、超自然的な語り一辺倒でない修養的な意味付けを加えている点も注目に値する。

・3-1-2 「奇跡」をアピールする幸福の科学で、信徒は「癒し」から何を得たか

幸福の科学の教祖は、「会員はコロナに罹らないので、奇跡の実証をあまりお見せできない」（大川 2021: 241）と豪語している。機関誌『The Liberty』では、ウガンダのテレビ局で教祖の法話や音楽が放映された直後に、感染者数が劇的に減少したことを、統計データを基に示している（『The Liberty』 2021.6月号: 18-19）⁽⁵⁾。

同誌では、20年の7月号（47頁）、21年の6月号（18-25頁）・9月号（82-83頁）・11月号（80-82頁）で合計22人の信徒の「祈願」による治癒の体験談を掲載している。内訳は、国内15人・海外7人、コロナ感染11人、濃厚接触者4人、原因不明の発熱4人、クラスター発生抑止2人、ワクチン副反応1人である。治癒を体験した当事者については、信徒が7人、信仰の有無の記述がない、信徒の親族や友人・同僚が14人（クラスターの事例を含む）、非信徒の家族が1人である。語りの内容はいずれも、祈願を受けることや教団の音楽や説法を聞くことで重篤な症状を脱する、あるいは感染を免れるというものである。それらの体験による信仰上の変化としては、自分は幸福の科学を信じていると気づき入会する（2021.11月号: 81）、代理祈願を受けた2世信徒が奇跡を感じて精舎に参拝し、兄弟のために祈願を受けるようになる（2021.11月号: 80）といった信仰心の獲得や、テクノロジーよりも霊的世界観が大切だと気付いた（2021.6月号: 23）、高熱の中での深い反省をへて主や家族の愛に感謝し、人生を主に捧げようと誓った（2021.6月号: 20）という信仰の強化が見られる。一方、祈願の対象となった非信徒においては、藁にもすがる思いで、頼れるご存在がいることのありがたさを感じるといった信仰に親和的な語りがある（2021.6月号: 24）ほか、霊的なものを信じないが早期回復に驚く（2021.6月号: 22）、「なんだかよく分からないけどありがとう」（2021.11月号: 82）と感謝されるなど、宗教的な「奇跡」という感覚を持っていない事例も多くみられた。これは、信仰の有無を問わずに祈願の効果が現れるという教団の力をアピールするとともに、既に信仰している読者に対しては、感染症から救われた際には反省と信仰の念を強く持ち、教団にさらなる貢献をするように、という理想的な姿勢を提示していると分析できる。

・3-1-3 小括

これらの語りから、「病気直し」の教義を持つ新宗教の信徒にとって、宗教実践を通じた「癒し」は現在も強い意味を持っていることが確認できる。しかし、多くの教団は、現代医療によるコロナの治癒に否定的な見解を示さず、医療によるケアの補助となる存在として

⁽⁴⁾ 「天理教の時間」,第1170回2022年3月19日・20日放送,「神様から頂いている「奇跡」」
<https://www.tenrikyo.or.jp/yoboku/radio/r1170/>

⁽⁵⁾ ただし、グラフ上では放送がない時期にも感染者の減少は起こっており、教団のテレビ放送との有意な関係はないという指摘もできる。

自教団の「癒し」を位置付けている特徴がある。信徒の個人的な「癒し」として病氣直しを受け入れ、外部の人間に対しては苦しむ人を「たすける」ためにそれを分け与える程度の実践にとどめる、という判断が教団・信徒において共有されているという指摘が可能である。

また、コロナに対する病氣直しにより癒された人物の中で、それを契機に入信したと語る例が幸福の科学の一つの体験談のみであったことも注目に値する。療術を掲げる教団においては、心身の不調和を信仰実践で癒したことで信仰を獲得していることと比較すると不可解に見える。しかし、パンデミックの初期から、治療方法は見つからないが、西洋医学と現代の技術によって治る可能性があるという認識が共有されたため、より信頼度の低い宗教による癒しの言説に縋るといった判断に至る非信徒がほぼいなかったという理由が考えられる。その一方で、信仰に基づく世界観を共有している者であれば、教団から距離を置いていた2世信徒の事例のように、その癒しを奇跡的な事実と認め、その信仰心を強めることができたと分析できる。

このような宗教的な現状の受け止めは、ともすれば一時しのぎのもの、現状の理解を矮小化するものとして批判されうる。しかし、感染対策以上のことを個人で行うことが困難であり、医師や行政の判断に従って行動をとらなければいけないという状況下においては、信仰によりコロナ下の生活に意味を見出し、それを通じて人間的な成長やより良い未来の実現が可能になるという考えを持つことは、心の安定において有意義な行為である。

多くの指導者・信徒は、コロナ下の社会が抱える問題として、逸脱者への攻撃や、感染者やその家族、医療従事者等を感染源として忌避・差別する行為を否定している。不安からくる怒りなどの悪感情を、信仰を通じて神への感謝などへ昇華することが、信仰実践において重視されたと指摘できる。

・3-2 コロナ下の新宗教信徒と共同体 天理教の社会事業を中心に

本節では、新宗教の信徒が、コロナウイルスの影響下において信徒コミュニティや地域社会との関係をいかに構築したかを考察する。

「隔離型」の宗教と分類される、極度に信徒の全生活を包摂する緊密な信仰共同体（島菌2021: 50）を除けば、新宗教の信徒は信仰を同じくする人々の共同体に属するとともに、地域社会という共同体にも、多くの場合宗教的マイノリティとして所属することになる。信徒コミュニティが地域社会内に形成されることを拒絶する動きが生まれることもある一方で、長年にわたって信徒コミュニティと接することや、信徒の社会事業等を通じて地域に恩恵がもたらされることで、地域社会から受け入れられ、歓迎されるケースもある。

コロナウイルスによって、教会での礼拝・集会や、団体参拝・キャンプといった信徒コミュニティの根幹をなす活動に多くの制限が生じた。また、教団内外で、感染拡大当初には人と人の接触が極端に忌避された。それによって、日本各地の地域社会で深刻化していた「無縁社会」化がさらに進行するとともに、コロナによる貧困などの問題に地域で十分に対応できない状態が生まれた。

その中で、新宗教もまた社会事業や近隣の助け合いを中心として、信徒共同体と地域社会の双方の状況を改善しようという努力をした。特に、長い歴史を持ち、地域社会に溶け込んだ教会運営が目指されている天理教においては、地域コミュニティにおける事業の実践に

ついて積極的に情報発信をしている。

・3-2-1 信徒コミュニティの保全是いかに行われたか

パンデミック下で、新宗教のコミュニティの従来通りの継続が困難になったことは、信徒が信仰から離れるリスクや、「家の宗教」としての信仰の継承を妨げるのでは、という不安を生んだ。その状況下で、様々な形の新たな宗教実践を通じたコミュニティの存続が図られた。

教団本部への団体参拝やそこでの集団生活による信仰共同体づくりは、県を越えての移動が緊急事態宣言で規制されたことで、大幅な変更を余儀なくされた。

天理教では、3か月間教団本部の施設で教義の学習や奉仕活動の実践を行う修養科や、児童が宗教活動の体験やレクリエーションを行い、信仰を深めるとともに同世代の信徒との交流をすることもおちばがえりといった活動が一時的に中止された。修養科については、20年中に再開され、感染拡大により仕事を失った者などの多くの志願者を得ており（『天理時報』2021.5.30付:2）、それを統括する教養室長も、コロナ禍の今だからこそ、仲間と共に「陽気ぐらしの3か月」を過ごすことで「心の向きが変わる」体験をするように呼び掛けている（同上:3）。

しかし、こどもおちばがえりは3年連続で中止となった。その代替として、21年から、自主的な善行の実践としてのひのきしんのモチベーションとしての「ひのきしんカード」配布（『天理時報』2021.7.18付:2）などが行われている。少年会では、おちばの遥拝やごみ拾い等のひのきしんの学びを行うオンラインセミナーを開催し（『天理時報』2021.5.2付:3）、家庭では十分にできない宗教教育を補っているが、児童向けの信仰共同体の代替となるものは十分に形成されていない。

・3-2-2 天理教信徒による社会事業は、コロナ下でどのように発展したか

多くの新宗教団体は、信徒を中心としたボランティア活動による社会事業を行っている。教団が有する経済力やトップダウン型の機動力と、信仰を軸とした信徒の活動は、清掃活動などの継続性の高い事業においても、災害ボランティアのような緊急性の高い事業においても、大きな役割を果たしている。災害救援ひのきしん隊は50年の歴史を持ち、コロナ下でも各地の豪雨災害の被災地で活動している⁶⁾。しかし、信徒が集団で活動することに制限が加えられたコロナ下では、トップダウンによる社会事業の指示・提案はほぼ行われなかった。

天理教では、「人たすけたらわが身たすかる」という教義に基づいて、積極的に社会貢献を行うことが推奨される。教祖の言葉・行いを通じてその思し召しを理解し、親神に創造された神の子として教えに基づく生活を目指す努力を通じて、親神につながる「一れつきょうだい」として、上下の隔てなく相互に助け合うことが、「陽気ぐらし」の実現に必須であるという福祉観が存在すると天理大学の八木三郎は分析している（八木 2011: 52-53）。

ひのきしんのあり方を考える「ひのきしんスクール」では、現代社会の複雑化した悩みに

⁶⁾ 「災害救援ひのきしん隊について」,天理教公式サイト. <https://www.tenrikyo.or.jp/jpn/saikyu/>

対処するためには具体的な知識や技術を身につける必要があるとしており、若い女性信徒向けのオンラインでの信仰相談を行う信徒と、コロナ以前からこども食堂を運営する信徒を交えたディスカッションを行った。こども食堂の運営を通じて、コロナ禍で両親の収入が激減した家庭や、感染や濃厚接触による隔離で孤立に苦しむ人々の難渋に向き合うことで、この信徒は常に相手の心のたすかりを願うようになったと語っており、悩む人の胸の内を傾聴したうえで、タイミングに応じて教会に導くという布教方針を示している。シンポジウムは、コロナに込められた親心がわかる日が来るとして、孤立した人々へのオンラインによるおたすけといった、これまでできなかったことに取り組む旬であるという語りで締めくくられた（『天理時報』 2021.10.27 付: 2）。

コロナ下で実行された「人たすけ」は、ごみ袋でエプロンを作って寄付する、道路沿いの花に水をやる、布製マスクを 500 枚以上つくる⁷⁾といった個人単位のものから、教会主体で地域を巻き込んで大々的に行われたものまで、多様にある。教団メディアで特集された、コロナ下で始まった社会事業として、以下の事例が確認できた。

ハワイのホノルル港教会の会長は、レストランからの発注がなくなり売れ残った食材で弁当をつくり、ドライブスルー方式で安価に販売する活動を、レストラン経営者の信徒とともに行った。その結果、信徒でない地域住民からも新たな活動への期待が寄せられ、困っている人々のために何かをしたい、という意識を地域住民と共有できたという。その後も、積極的に地域のための奉仕を行い、ボランティアコンテストのファイナリストとなった。その結果、協力者が増加し、活動がさらに広がった（『天理時報』 2021.12.8 付: 4-5）。

天理教青年会による兵庫県の教会が行う「へいなんこども食堂」のルポルタージュによれば、3年前に始まったこの事業は、イベント前に行くことで、未信者をおちばや大教会につなげる目的があった。コロナ禍により食堂の中止が余儀なくされたことで方針を変え、行政や地域とのネットワークを駆使して食材を集め、戸別訪問やお話会、ママ友などのつながりで人材を集めて、テイクアウトの弁当の無料配布を行った（『あらしきとうりょう』 2021.8 月号: 36-37）。会長が未信者と接する際には、「なぜするのか」という説明を添えることと、教会に来た時に何か役割を与えることで、教会に必要な人間だと感じられるようにしている（同上: 40）。協力者のほとんどは未信者で、教会を拠点に地域のたすけ合いの連帯が形成されている（同上: 42）。

天理教青年会の機関誌では、分教会の教会長の後継者となった 2 人の若手信徒の活動が紹介されている。愛媛県の分教会では、信徒の人脈を通じて千坪以上の土地を借り、障害者就労支援事業所として農園をつくり、先天性障害や愛着障害を抱える里子の就労先を創出するというおたすけを始めた（『あらしきとうりょう』 2021.5 月号: 40）。また、高齢者への弁当配布を通じて地域交流を深め、「教会はたすかる場所」ということを伝えたいとしている（同上: 42）。

奈良県の分教会では、コロナ禍で中止された月次祭の弁当を信徒に配布したことをきっかけに、地域に向けたおたすけとして、信徒の持ち寄る食材や教会内の畑の野菜で弁当をつ

⁷⁾ いずれも三重県の分教会の事例。「「コロナ禍」で気づいたこと」,「天理教の時間」,2021.2.13 放送分. <https://www.tenrikyo.or.jp/yoboku/radio/r1113/>

くり、高齢者に 200 円で配達する活動を始めた (同上: 45)。都会のこども食堂では、利用者の生活状態を把握できないのに対し、田舎の教会での弁当配りではそれがやりやすいというメリットを語っている (同上: 48)。

愛媛の事例では、信徒たちは戸別訪問を通じて親神様・教祖の働きがないと人をたすけられないと気づき、教会長就任前後に子どもが難病にかかるなどの「お手入れ」を受け、お願いづとめとお供えをすることでたすけられたという経験をすることで、信仰への自信と誇りを持っている (同上: 39-40)。奈良の一信徒の事例では、日本一周の旅で九州の豪雨被災地を見たことで「人だすけ」の精神が足りないと気づき (同上: 46)、同時に特別なことをしなくてもおたすけはできると学んだこと (同上: 50) を活動の原点としている。いずれの事例においても、大きな「回心」の経験を通じて信仰が強固なものとなり、それによって「おたすけ」を可能にする精神的モチベーションが確立しているという共通点が指摘できる。

・ 3-2-3 小括

幕末以降、数世代にわたり信仰の継承がなされてきた歴史をもつ天理教が、既存の社会事業のプラットフォームを超えて、コロナ禍において深刻化した貧困などの社会問題に、困難の現状に対する学びや、信徒中心の草の根的な手法で向き合っている点は、非常に興味深い。

天理大学おやさと研究所の金子珠理は、社会貢献としての事業を展開する中で自然と地域に教会が開かれるようになり、「社会全体で取り組むべき家庭的養護への関心を喚起し、それを普遍化して社会へと橋渡し(bridging)していく原動力となっている」(金子 2013: 174) と論じている。

翻ってこれまでの事例を見ると、就労支援施設としての農場の運営は里親という既存事業の発展形であり、信仰につなげるための事業として始まった子ども食堂もまた、コロナ禍において新たな事業へと進展した事例であるといえる。青年会の機関誌を中心に調べたため、若手の活動の事例が多いが、その特徴として社会事業における教会と地域の垣根が極めて低いことが指摘できる。前述の里親事業の論文では、天理教の教会は、「教会長家族の教会」と呼べるようなクローズドな組織になりがちだといわれているが、これらの事例の若手信徒は、「家の宗教」として天理教をとらえ、教団外で様々な人生経験を積んでいることから、オープンな教会づくりと、社会の現状に即したおたすけの実践に対する躊躇が比較的少ないと分析できる。

強い信仰心によって、コロナという困難においても活動を縮小・中止することがなく、地域の人々が抱える困難が何かを把握してそれを実践し、事業を通じた反省や達成感を得ることでさらに神への奉仕の意識と反省・感謝といった宗教的情熱を強化することができている、という精神的な意義の存在も指摘できる。

・ 4 結論

ここまで、コロナウイルスの影響下の新宗教における指導者と信徒の語りや、教団の公式メディアを中心に分析してきた。教団のメディアを用いたことで、末端の信徒を指導する立場にある一種の管理職としての教会長の指導や、教義から逸脱しない範囲での信仰に関する

る投稿、称賛に値する行動をとった一般の信徒といった、教団内の「ブライト」な現象・言説のみが篩にかけられて提示されていることを理解したうえで分析する必要がある。

結論にあたって、これまでの網羅的新宗教研究においてテーマとされた事象に関して、コロナ禍の3年間ではどのような変化が起こっていたのかについて考察する。先行研究の代表として、島藺進の『ポストモダンの新宗教』を取り上げる。新新宗教を主な研究対象とする同書では、高度経済成長からバブル期への時代の移行により、入信の動機が貧病争からの脱却から精神的な虚しさの解消へと変化した、といった信仰世界の変化と、ナショナリズム的思想、近代的価値観との対抗という3つのテーマを軸に議論をしている。信仰世界の変化として、島藺は入信動機の変化・現世離脱の志向・心なおしの脱倫理化・神秘現象と心身変容への関心・自己責任の強調・聖なる宇宙の再構成・破局切迫の危機の7つの変化を記している。

それぞれについて現状を考察すると、入信動機の変化については、入信者に関する語り自体が少ないため明言はできないが、幸福の科学における直接的な「奇跡体験」を通じた信仰獲得などが見られ、それ以外の新宗教においては、今現在入信している信徒がコロナ下で離脱することを防ぐ「囲い込み」的言動が多く見受けられる。対外向けメディアにおいても、信仰生活によって獲得できるよい生活の紹介や、道徳的メッセージの発信に終始している。現世離脱の思想については、「現世」を批判的にとらえる言説はあるものの、「人生の価値を低くみる」（島藺 2021: 65）信仰はほぼ見られなかった。コロナにより信仰共同体を含むコミュニティが閉鎖され、「家」という「現世」での生活を求められたこと、またコロナによって死が常に意識されることで、信仰を通じて人生を放棄する、といった発想が起こりづらくなったことが変化の要因と推測できる。

ニューソート的な手法による心なおしの脱倫理化については、コロナの「悪」を否定した生長の家などを当てはめることができるが、その信仰の根底には明確に倫理性がある。また、心の操縦をうたう宗教の一例として挙げられている幸福の科学（同上: 68-69）も、信仰を通じた「正しい生き方」をすることで悔いのない死と神の救いが得られるという倫理的な信仰形態に収斂している。神秘体験について、島藺は神秘の「脱手段化」が起きているとしたが（同上: 74）、多くの民衆がコロナ感染の回避や治癒、流行の終息といった目的を持った祈りをしている状況においては、「病氣直し」的な神秘現象が優先的に求められ、それ以外のは隅に追いやられたと指摘できる。

自己責任の強調については幸福の科学で見られる。それ以外の教団では、感染者を批判せず、その苦しみを受け止めることが求められ、自己責任論的な言説はほぼ見られなかった。聖なる宇宙の再構成についても、幸福の科学で顕著に表れ、光の宇宙人と闇の宇宙人の抗争というコスモロジーが流用される形でコロナ禍に対する解釈がなされている。生長の家のように、教団に既存のコスモロジーの中にコロナという新しい存在を置く言説は他教団にもある。破局言説については、予言の失敗という経験を経ても各教団の信仰の根底として残存している。

また、ナショナリズム言説に関しても、コロナ禍に関連する文脈での表象はほぼなかった。幸福の科学は、ナショナリズム的な歴史観・世界観を維持しているが、神道の国之常立神（くにのこたちのかみ）を「善悪の概念がなく、判断ができない」存在として語り、日本の指

導者たちもそれと同様に判断力がない存在であると批判するなど（大川 2020a: 222）、コロナ禍への日本社会の対応には極めて批判的であった。近年の日本や国際社会においてナショナリズムの過熱が社会の軋轢を生んでいるという情勢や、日本政府のコロナへの初動対応が他国よりも遅れたという状況から、コロナ問題を通じてナショナリスティックな考えを鼓舞する、という動きにつながらなかった、という外的な要因も指摘できる。

近代的価値観への対抗言説は、新宗教・新新宗教の違いを問わずに多くの教団で行われていた。これは、コロナ蔓延以前からの、現代資本主義社会によって生まれた格差拡大や環境破壊といった負の側面への注目と、それらの問題の解消が世俗社会においても深刻化していたという状況が明確に影響している。

多くの教団のコロナ下での活動に特徴的なこととして、布教の積極化などの外部への拡張よりも、すでに信仰している信徒に安心を与え、教団へつなぎ止めることを重視する動きがある。すでに教団の教義が身につけている信徒に、教義に基づいた指導や祈りを行うだけ、という姿勢は新宗教勢力の衰退によるものだ、と考えることもできる。しかし、不安や恐怖、などで疲弊した信徒が現実にいる中で、信徒を巻き込む動きをおこすよりも、信徒の抱える精神的苦しみへのフォローや相互扶助による経済的苦難の支援といった、既存のシステムを動員した「守り」の体制に入ること、感染収束後に信徒が活動に立ち戻れるように力を温存する、という判断がとられたとも分析できる。

西洋医学の価値観を共有する社会からは荒唐無稽なものとする「病気直し」の存在は、現代の信徒にとっても身心の支えとなっていることが確認できた。病気直しにのみ頼る、という主張は多くの教団で否定されており、相手をたすけたいという心と、それを信じる心の働きで効果が現れる、といった控えめな主張がなされている。しかし、信徒においては、自分や他人の「癒し」を信じてその実践をすることで、満足や自信を持ち、何等かのポジティブな変化が身心に現れれば、それを神のご守護と考えて感謝することができる。また、できなくとも将来的には神が改善してくださる、といった考えを持てるといったプラスの効果が期待できる。コロナ下の不安に対する一つの対処法として、指導者・信徒ともに、教団内で継承されてきた病気直しの実践がなされたものと考えうる。

信徒も、教団指導者や地域の教師などによる教義に基づくコロナ理解と精神的苦痛を和らげるような指導を直接・間接的に受け、それを自分の考え方の中に取り入れることで、不安や悲観的感情をコントロールできた。また、それを子どもや信仰していない家族へと波及させ、地域社会のつながりを通じて安心感を共有する、という姿勢は、「心なおし」の連鎖による家庭や社会の改善という、伝統宗教においても見られる考え方が実践を通じて現れたものであるともいえる。

特に、天理教などにおいて、若い信徒が教会を拠点に自主的な社会活動をはじめ、地域との垣根を超えた活動へと展開していることは、現代における宗教と社会のつながりの変化を見る上で非常に興味深い動きであるといえる。古くから、寺社などの宗教施設は、信徒の集会の場であると同時に、困窮者への支援等の社会事業のプラットフォームとして機能しており、信仰の有無を問わずに支援に参加し、あるいは支援を受けることができる空間としての社会的立ち位置を有していた。しかし、多くの社会においてマイノリティとなる新宗教の施設は、信徒でない地域住民にとっての敬遠の対象となりやすい。しかし、コロナ下では、

人の役に立つ行為をしたいという意識を持ちながらも、行動制限によってそれができずにいた人々に地域レベルでの活動の場を与えたといえる。この現象は、新宗教と社会の間の分断・排除の構図を取り払うことを可能にする一つの実践であったと分析できる。

本論では、新宗教の公式メディアを対象を絞っての論考を行い、「衰退論」が発せられる日本の新宗教の現状に対する教団・信徒の両サイドからの分析を行った。それにより、コロナ下においても、信徒の内面では信仰の強化が見られ、教義を通じた意味づけの共有や信仰実践による「癒し」などの獲得を通じて、社会に蔓延した不安と向き合うことが可能になっていることがわかり、同時に教団と社会の分断の問題を解消するような行動が見られることがわかった。コロナ下の社会においては、爆発的な宗教への関心拡大は見られないが、部分的に非信徒を巻き込みつつ、教団内に残っている人々への呪術的・修養的・共同体的な「癒し」の提供が教団の中心的な活動となったといえる。そして、社会情勢が劇的に変化する中で、感染収束後の社会においても、現状に即しながら信仰が存続するよう努める動きを確認することもできた。

宗教に対する不信が蔓延した社会において、新宗教の指導者と信徒がどのようにコロナという問題に向き合い、教団内外への働きかけを行ったかを示すことで、新宗教史の最新の動きを追うことができたと考えている。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、(公財)宗教情報リサーチセンターの皆様には、各教団の資料の閲覧・複写で大変にお世話になりました。心からの感謝を申し上げます。

参考文献

- David Emmanuel Singh, "Role of Religions in the Spread of COVID-19," in *Journal of Ecumenical Studies* vol. 55(2), 2020, pp. 289-310.
- 石川明人 2010 「祈り」『宗教学事典』丸善, 260-261 頁。
- 稲葉圭信・黒崎浩行編 2013 『震災復興と宗教』明石書店。
- 井上順孝ほか 1990 『新宗教事典』弘文堂。
- 今井信治 2022 「浮遊する宗教的関心と宗教的文化資本の継承——実証研究に基づく理解を目指して」『第 12 回学生宗教意識調査』國學院大學, 53-80 頁。
- ウェーバー, M (中山元訳) 2017 『世界宗教の経済倫理——比較宗教社会学の試み 序論・中間考察』日経 BP。
- ウェーバー, M (大塚久雄・生松啓三訳) 2019 『宗教社会学論選 新装版』みすず書房。
- 海山宏之 2010 「病気」『宗教学事典』丸善, 638-639 頁。
- 大川隆法 2020a 『コロナ・パンデミックはどうなるか』幸福の科学出版。
- 大川隆法 2020b 『イエス・キリストはコロナ・パンデミックをこう考える』幸福の科学出版。
- 大川隆法 2020c 『コロナ不況下のサバイバル術』幸福の科学出版。
- 大川隆法 2021 『秘密の法』幸福の科学出版。
- 葛西賢太・坂井正斉編 2013 『ケアとしての宗教』明石書店。
- 金子珠理 2013 「ソーシャル・キャピタルとしての天理教里親活動の可能性」『ケアとしての

- 宗教』明石書店, 150-179 頁。
- 桂島宣弘 2003 「「病気直し」から「教説の時代」へ——民衆宗教と幕末維新」『環』第 13 号, 藤原書店, 219-225 頁。
- 黒崎浩行・佐藤壮広・君島彩子・司会：西村明 2021 「ウィズ・コロナ, ポスト・コロナの信仰のカタチ」『現代宗教 2021』国際宗教研究所, 33-53 頁。
- 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編 2017 『第 12 回学生宗教意識調査』國學院大學。
- 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編 2022 『第 13 回学生宗教意識調査』國學院大學。
- 櫻井義秀 1997 「新宗教の形成と社会変動——近・現代日本における新宗教研究の再検討」『北海道大學文學部紀要』第 46 号, 北海道大学文学研究院, 111-194 頁。
- 島藺進 1992 『現代宗教救済論』青弓社。
- 島藺進 2021 『ポストモダンの新宗教』法蔵館 (原著：2002 年)。
- 杉山幸子 2004 『新宗教とアイデンティティ——回心と癒しの宗教社会心理学』新曜社。
- 世界宗教百科事典編集委員会 2012 『世界宗教百科事典』丸善。
- 棚次正和 1998 『宗教の根源——祈りの人間論序説』世界思想社。
- 濱田泰三編 1987 『現代のこころ——天理教』旺文社。
- 文化庁宗務課 2021 『宗教年鑑令和 3 年度版』文化庁。
- 星野英紀ほか 2010 『宗教学事典』丸善。
- 堀江宗正 2021 「宗教と感染爆発——通過儀礼としてのパンデミック」『宗教研究』95 卷 2 輯, 日本宗教学会, 75-98 頁。
- 村上重良 2007 『新宗教——その行動と思想』岩波書店 (原著：1980 年)。
- 八木三郎 2011 「社会的養護における天理教里親の意義」『天理大学おやさと研究所年報』第 17 号, 天理大学附属おやさと研究所, 39-57 頁。
- 若松英輔・島藺進・司会：弓山達也 2021 「新型コロナウイルス禍で期待される宗教者の役割」『現代宗教 2021』国際宗教研究所, 5-31 頁。

Web サイトは全て 2023.12.27 最終閲覧。

How did New Religions React to COVID-19 Pandemic? Research from Material that Officially Issued

Toshiki TSUBOI

This paper investigates how Japanese new religions responded to complex social situations during the COVID-19 pandemic between 2020 and 2022. Particular attention is paid to how leaders and congregations of new religions attempted to maintain their traditional religious life and engage in such activities as proselytizing, face-to-face meetings, and gatherings in the face of increasing difficulties. Using samples of two new Japanese religious organizations, Tenrikyo, established in the 19th century, and Happy Science, established in the 1980s, we investigate and compare references to the pandemic in the messages of their leaders transmitted through books, magazines, and broadcasts, as well as in the pitches and interviews of their followers featured in their official journals. First, we analyze the leaders' messages regarding their transmission timing and themes, such as moral guidance and prayer during the pandemic. From the survey on the "prayer" content, we could discern differences in how the congregation thought about relieving its anxieties. Second, through the congregation's words and actions in response to the pandemics, we examine how the religious "healing" for mental and physical suffering under difficult circumstances took place. In addition, we examine how the congregants maintained their social ties within the denomination and local communities. Finally, drawing on the theory of the characteristics of new religions at the end of the 20th century addressed by Susumu Shimazono in 2002, we conclude by suggesting how changing times in challenging environments over the past 20 years have brought about changes in the new religions.